Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7 の研究（2）

尾　園　絢　一

0. パーニニは Pāṇ. III 1,7 において欲求の意味で，*sa*^{N} を導入して Desid. を作ることを定めている：

> Pāṇ. III 1,7 *dhātoḥ karmaṇaḥ samānakartṛkād icchāyāṃ vā*［*san* 5, *paraḥ* 2, *pratayaḥ* 1］動詞語基［が示す行為］が［欲求行為の］対象となり，［欲求の主体と］同じ主体を持つ場合，その後に，欲求の意味で *sa*^{N} が用いられる。

カーティアーヤナ，パタンジャリはこの規則の個々の文言の必要性について議論を展開している。前の論文において，*dhātoḥ*「動詞語基の後に」の必要性を巡る議論を取り扱った[1]。これまで展開された議論において *dhātoḥ* の文言は不要であると述べられた。本稿では，その次に *karmaṇaḥ*「行為対象の後に」と *samānakartṛkād*「行為者を同じくする［動詞語基］の後に」の必要性を論じる Bhāṣya（vol. II, p. 13, line 11 − p. 14, line 2）と Pradīpa を読み解く。

1. 議論の要旨

Pāṇ. III 1,7 に見られる文言，*karmaṇaḥ*「行為対象の後に」と *samānakartṛkād*「行為者を同じくする［動詞語基］の後に」の必要性について問題提起が為される。欲求行為は欲求の対象となる行為の存在を自明の前提としているので，行為対象という文言は必要ない（§17 − 18）。また実際の使用においては，*devadattasya bhojanam icchati*「彼は Devadatta が食べることを欲する」のように欲求の主体と行為主体とが異なる文の場合は Desid. を作ることはないので，*samānakartṛkād* の文言も必要ない。

その結果，Pāṇ. III 1,7 は *icchāyāṃ vā* の文言だけで十分であることになるが，とはいえ語幹と動詞前接辞の境界はっきりさせるためには，これまで無意味とされてきた *dhātoḥ*「動詞語基の後に」，*karmaṇaḥ*「行為対象の後に」のどちらかが必要となる。そ

[1] 尾園絢一「Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7 の研究：意欲語幹（Desiderativ）動詞の機能に関するパーニニ文法学の理解について」『東北大学文学研究科研究年報』第 63 号，pp. 284（31）− 262（54）。

の場合，*dhātoḥ* があれば，*sa*^{N} が接辞であり，かつ ārdhadhātuka であることがわかるので，*dhātoḥ* の文言が優先される（§19）。

だが，そうすると，以前に述べられた *dhātoḥ* の文言は不要とする見解（Vārt. 1－3, §1）と矛盾することになる。そこで他説を批判するあまり不適切な陳述が見られるが，適切な陳述のみを取り上げるべきであると説明する。即ち，*dhātoḥ* と *karmaṇaḥ* の中，*dhātoḥ* の文言が必要であり，しかも動詞前接辞（*upasarga-*）伴う動詞語基が行為対象であると述べられる。だが，そうすると §6 で述べられているように動詞前接辞と共に行為対象を構成する動詞語基は当然行為対象の一部にすぎないので，Abl. *karmaṇaḥ* は *dhātoḥ* と同一の対象を指示することにならない。また *karmaṇaḥ* の語形を全体と部分の関係を表す Gen.（*avayavaṣaṣṭhī-*）と見なす場合は，部分を持たない単独（Simplex）の動詞語基の後には *sa*^{N} を導入できないことになる。

この問題に対し，§24 において，Gen. *karmaṇaḥ* は体と部分の関係を表す Gen. と呼ばれるものに準ずる関係（*vyapadeśivadbhāva-*）にあたるので，部分も全体も表すことができる。その結果，動詞前接辞を伴う動詞語基だけでなく単独の動詞語基の後に *sa*^{N} を導入することが可能になる。

だがそうだとすると，*karamaṇaḥ* は後続の規則 Pāṇ. III 1,8 に継承されるので，全く同じことを根拠にして，この関係が適用される[2]。その結果，*mahāntaṃ putram icchati*「彼は［自分に］偉大な息子を欲する」のような文から Denom. を作ることできるという問題が起こる。だが，*icchati* は *māhāntam* と *putram* という複合語的結合の外にあり，その場合は，対応する統合表現，即ち Denom. を作ることができないので，問題ない。

2. Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7（vol. II, p. 13, line 8－p. 14, line 2）訳

§17【*karmasamānakartṛka-* 文言は無意味とする立場】

Vārt.

karmasamānakartṛkagrahaṇānarthakyaṃ cecchābhdhāne pratyayavidhānāt // 6 //

そして「*karman-*」，「*samānakartṛka-*」の文言は意味がない，欲求を表す場合に接辞の導入規定があるから。

---

[2] Pāṇ. III 1,8 *supa ātmanaḥ kyac*［*karmaṇaḥ* 7, *icchāyāṃ vā* 7, *paraḥ* 2, *pratyayaḥ*］「［欲求行為の］対象［示す］名詞（*s*^{UP} で終わる語）の後に，自分に対する欲求の意味で任意に $^{K}ya^{C}$（Denom.）が［導入される］」

Bhāṣya

karmasamānakartṛkagraganaṃ cānarthakyam / kiṃ kāraṇam / icchābhidhāne pratyayavidhānāt / icchāyām abhidheyāyāṃ san vidhīyate //

「*karman-*」,「*samānakartṛka-*」の文言は意味がない。何故か。欲求を表す場合に接辞［の導入が］が規定されるから。欲求が表示されるべき時は，*sa*^{N}［の導入が］規定される。

§ 18【文言を無意味とする根拠】

Vārt.

akarmaṇo hy asamānakartṛkād vānabhidhānāt // 7 *//*

何故ならば，行為の対象ではない［動詞語基］の後，又は同じ行為者を持たない［動詞語基］の後ろに［*sa*^{N} が導入されても欲求の意味を］表示しないから。

Bhāṣya

icchāyām abhidheyāyāṃ san vidhīyate. na cākarmaṇo 'samānakartṛkād votpadyamānena sanecchāyā abhidhānaṃ syāt / anabhidhānāt tata utpattir na bhaviṣyati //

欲求が表示されるべき時は, *sa*^{N}［の導入］が規定される。だが, 行為の対象ではない［動詞語基］の後に，又は［欲求の対象となる行為と］共通の行為者を持たない［動詞語基の］後に *sa*^{N} が生じることによっても，欲求の表示は起り得ない。［欲求の意味を］表示しないから，それ（行為の対象を表示せず，共通の行為者を持たない動詞語基）の後に，［*sa*^{N} が］生じないであろう。

Pradīpa

karme*ti / icchāyāḥ karmaṇāvaśyaṃ bhāvyam iti pratyāsattyā prakṛtyartha eva karmatvenāśrayiṣyate na tu tadvyatiriktam iti gamanenecchatīti san na bhaviṣyati / pratyāsttyaiva ca samānakartṛkatvam āśrayiṣyata iti devadattasya bhojanam icchatīty atrāpi na bhaviṣyatīty etan nyāyamūlam anabhidhānam // iha nityānāṃ śabdānāṃ saṃkīrṇaprayogadarśane sati sādhvasādhuvibhāgāya śāstrārambhaḥ na ca gamanenecchati, devadattasya bhojanam icchatīty atrārthe jigamiṣati bubhukṣata ityādiprayogo 'stīti kiṃ tannivṛttyarthena viśeṣaṇopādānenety arthaḥ //*

「***karma***」以下について。「欲求［という行為］には必然的に行為の対象が生じるべき

である」という近接性（類推）によって, 語基の意味だけが行為対象として（*karmatvena*）根拠づけられることになるが，それ（語基の意味）とは異なる［行為対象は根拠づけられ］ない。従って，*gamanenecchatti*「行くことによって［何かを得ようと］欲する」という［文］においては, *sa*^{N} が生じることにはならない。また同じ近接性（類推）によって同じ行為者を持つことが根拠づけれる，従って *devadattasya bhojanam icchati*「彼は Devadatta が［食べ物を］享受することを欲する」というこの場合も，［*sa*^{N} が］生じないであろう。従ってこのような道理に根差して，［欲求の］意味を表示しない。

ここ（我々の間）では，常住な語形たちの［正しいものと正しくないものという］混交した使用が見られる時に, 正しい［形］と正しくない［形］を分けるために, 教え（文法学）［を学ぶこと］に取りかかる。だが，*gamanenecchatti*「行くことによって［何かを得ようと］欲する」，*devadattasya bhojanam icchati*「彼は Devadatta が［食べ物を］享受することを欲する」というこの［文と同じ］意味で *jigamiṣati*, *bubhukṣati* などの使用は［そもそも］ない。従って「それを停止するための限定要素（*karmaṇaḥ* と *samānakartṛkād*）を［規則に］取り入れることが何になろうか」という意味である。

解説

例えば，*gamanenecchati*「行くことによって［何かを得ようと］欲する」という分析表現（*vākya-*）において，*gam* によって表示される「行く」という行為は欲求行為の対象（*karman-*）ではなく手段（*karaṇa-*）を表しているが，*jigamiṣati* という統合表現（*vṛtti-*）がこの分析表現と同じ意味を表すことは（理屈の上では考えられるとしても）実際の言語使用においては想定されない。同じく *bubhukṣate* は *devadattasya bhojanam icchati* のように欲求の主体と対象となる行為の主体が異なる文と同じ意味を表すことは想定されない。

Pradīpa によれば，文法学は *jigamiṣati* や *bubhukṣate* 等の語形が正しいか否かを判定するが，そうした語形が欲求の対象となる行為や欲求の主体と行為主体が同一であることを適切に表示しているかどうかを決定することは文法学の役目ではない。従って，*jigamiṣati* が仮に *gamanenecchati*「行くことによって［何かを得ようと］欲する」のように手段（*karaṇa-*）を表示しているとしても，これを文法学に基づいて誤りと判定することはできない[3]。従って *karmaṇaḥ samānakratṛkād* の文言は必要ない。

[3] Udyotta : *karaṇādyākāṅkṣā tu na niyateti bhāvaḥ // vyāptinyāyāśrayaṇe 'pi samādhatte − iha nityānām //*

§ 19【*dhātoḥ* と *samānakartṛkād* の中，*dhātoḥ* の文言を必要とする立場】

Vārt.

aṅgaparimāṇārthaṃ tu // 8 //

だが語幹を限定するために［どちらか一つの文言だけが設けられるべきである］。

Bhāṣya

aṅgaparimāṇārthaṃ tarhy anyatarat kartavyaṃ karmagrahaṇaṃ dhātugrahaṇaṃ vā / aṅgaparimāṇaṃ jñāsyāmīti //

kiṃ punar jyāyaḥ / dhātugrahaṇam eva jyāyaḥ / aṅgaprimāṇaṃ caiva vijñātaṃ bhavaty. api ca dhātor vihitaḥ pratyayaḥ śeṣa ārdhadhātukasaṃjño bhavatīti sana ārdhadhātukasaṃjñā siddhā bhavati //

それなら語幹を限定するために *karman-* の文言か *dhātu-* の文言かのどちらか一方が設けられるべきである。私が語幹の境界を認識するように。

だがどれが優先されるのか。*dhātu-* の文言が優先される。すると語幹の境界が見分けられるようになる。しかも動詞語基の後で［導入が］定められている接辞は，「残り（人称語尾と *ś* を it とする接辞以外）は ārdhadhātuka の名称を持つものとなる」というように，*sa*^{N} には ārdhadhātuka の名称が確立している。

Pradīpa

aṅgaparimāṇārthaṃ tv *iti / icchāyāṃ vety etāvaty ucyamāne yady api pratyayaparatvena pūrvā prakṛtir ākṣipyate tathāpi prācikīrṣad ityādau sopasargasyāṅgatvaṃ syāt / yadā tu sākṣāt prakṛtir viśiṣṭā nirdiśyate tadāṅgaparimāṇaṃ jñāyate //*

anyatarad *iti / tritaye pratyākhyāte anyatamam iti vaktavye samānakartṛkagrahaṇaṃ na kartavyam eva gauravaprasaṅgād iti matvānyatarad ity uktam //*

---

tatra samānakartṛkatvādiprakārakabodho lokavyutpatter eva na hi sarvatra vyākaraṇam eva śaktigrāhakam astīti bhāvaḥ「手段など［の意味を］欲することは制限されていない。以上が意図するところである。拡大原理に依拠して［語基が手段などの意味を表示する］場合も，［*sa*^{N} の使用］が認められる。［だから］*iha nityānām* 以下［と言っている］。その場合，行為者を同じくすることなどといった類の理解は世間の語義解釈のみに基づく。何故なら，如何なる場合でも文法学は［語の意味表示］能力を［判定の対象として］捉えないから」。

dhāṭugrahaṇam eve*ti // kāryāntarasyāpi saṃpādanād ity arthaḥ / dhātuśabdoccāraṇena dhātor vihitasyārdhadhātukasaṃjñoktā / tathā ca pūrvasūtradvayavihitasya sanas tadabhāvāj jugupsata ityādāv iḍabhāvaḥ / etat sūtravihitasya tu sana ārdhadhātukatvāc chiśayiṣata ity ādāv iḍguṇau bhavataḥ //*

nanv “*iko jhal*”（Pāṇ. I 2,9）*iti / kittvam ārdhadhātukanimittaguṇaniṣedhārthaṃ sana ārdhadhātukasaṃjñājñāpakaṃ bhaviṣyati //*

naitad asti / sāmānyena jñāpake vyākhyāyamāne sarvatra sanaḥ prasaṅgaḥ / viśeṣaviṣaye tv igantaprakṛter eva syād iti dhātugrahaṇaṃ kartavyam //

「***aṅgaparimāṇārathaṃ tu***」以下について。「欲求を示す場合は任意で［*sa*^{N} が用いられる］」とこれだけが言われていれば，接辞が［語基に］後続するということによって［接辞に］先行する語基が［規則の内容に］取り込まれるとしても，そうだとしても *prācikīrṣat* などのような動詞前接辞をともなう［語基］が語幹となることが起こり得る。だが語基が［*dhātoḥ*, *karmaṇaḥ*, *samānakartṛkād* のいずれかの文言によって］限定されて直接示される時，その時は語幹の境界が認識される。

「***anyatarad***」以下について。「［*dhātoḥ*, *karmaṇaḥ*, *samānakartṛkād* という］3 つの中，どれか一つが禁止される」と言われるべき時，*samāṇakartṛka-* の文言は，重く（音節数が多く）なる事態になるので，設けられるべきではないと考えて，「［それ以外の］どちらか一方が［設けられる］と言われている。

「***dhātugrahaṇam eva***」以下について。他の文法操作にも作用するから［*dhātu-* の文言だけが設けられるべきである］という意味である。*dhātu-* の語を発することによって，動詞語基の後に［導入が］定められる［接辞］には *ārdhadhātuka-* の名称が言われる。そうだとすると 2 つの先行規則（Pāṇ. III 1,5-6）によって［導入が］定められている，*sa*^{N} は，それ（ārdhadhātuka の名称）が生じないから，*jugupsate* などにおいて *i*^{T} は生じない。だが，以下の場合は，規則に定められた，*sa*^{N} が ārdhadhātuka であるから，*śiśayiṣate* 等において，*i*^{T} と guṇa が生じる。

（反論）Pāṇ. I 2,9 *iko jhal*「*jh*$_{a}^{L}$（Obstruent）で始まる *sa*^{N} は［*k* を it とする］」と言われているではないか。*k* を it とすることは，ārdhadhātuka を操作の原因とする guṇa を禁止するためにあり，*sa*^{N} が ārdhadhātuka の名称をもつことを示唆するもの（*jñāpaka-*）になるであろう。

（反論に対する答え）このようなことはない。示唆として一般的に説明されるならば，

全ての場合に［ārdhadhātuka の名称が］*sa*^{N} に対して適用［されてしまう］。個別の領域において，*i*, *u*, *ṛ*, *ḷ*（*i*^{K}）で終わる語基の後だけに［*i*^{T} を伴わない *sa*^{N} が］生じるために *dhātu-* の文言が設けられるべきである。

解説

ここでは，語幹と動詞前接辞との境界をはっきりさせるためには，*dhātoḥ*, *karmaṇaḥ*, *samānakartṛkād* の中，いずれかの文言が必要となる。その場合，Pradīpa によれば，先ず *samānakartṛkād* は音節数が多いので除外され，*karmaṇaḥ* と *dhātoḥ* のどちらか一方が選ばられることになるので，*anyatarat*「どちらか一方」と Bhāṣya で言われている。

そのような場合は，*dhātoḥ* の文言が必要となる。動詞語基の後に導入されるのは接辞に他ならないので，当該規則の *dhātoḥ* の文言によって，*sa*^{N} は接辞であることが自明となることが理由である。また *sa*^{N} は，*ś* を it に持たないので，Pāṇ. III 4,114 によって，ārdhadhātuka-suffix と見なされる[4]。他方，先行規則 Pāṇ. III 1,5－6 には *dhātoḥ* の文言がないので，当該規則に挙げられる *gup* などの後に導入される *sa*^{N} は接辞とは認められず，ārdhādhātuka-suffix ではないとされる。Pāṇ. VII 2,35 によれば[5]，ārdhadhātuka の前に付加音 *i*^{T} は生じるので，*sa*^{N} が ārdhadhātuka-suffix でない場合は，その前に *i*^{T} が挿入されない。それ故 *jugupsate* が導き出される。

これに対し Prādīpa に引用される反論によれば，Pāṇ. I 2,9 は *i*, *u*, *ṛ*, *ḷ*（*i*^{K}）で終わる動詞語基に *i*^{T} を伴わない *sa*^{N} がつく場合には guṇa 化が禁じられることを定めており[6]，逆に言えば，*sa*^{N} は ārdhadhātuka であるから *i*^{T} が挿入され得るということが示唆（*jñāpaka-*）される。従って *dhātu-* の文言がなくても，*sa*^{N} の前に *i*^{T} は挿入されるので不要である。

この反論に対して，もし Pāṇ. I 2,9 による示唆を認めるならば，例外なしに *sa*^{N} は ārdhadhātuka-suffix と見なされるので，*gup* などに *i*^{T} が挿入されることが起こってしまう。従って，*dhātoḥ* によって，Pāṇ. III 1,7 に定められる *sa*^{N} だけが ārdhadhātuka-suffix と見なされねばならないと答えられる。

---

[4] Pāṇ. III 4,114 *ārdhadhātukaṃ śeṣaḥ*「残りのものは ārdhadhātuka［と呼ばれる］」。Cf.Pāṇ. III 4,113 *tiṅśit sārvadhātukam*「人称語尾である語と *ś* を it とする語は sārvadhāruka［と呼ばれる］」。

[5] Pāṇ. VII 2,35 *ārdhadhātukasyeḍ valādeḥ*「ārdhadhātuka-suffix の先頭に付加音 *i*^{T} が生じる」

[6] Pāṇ. I 2,9 *iko jhal*［*san* 8, *kit* 5］「*jh*$_{a}$^{L}（Obstruent）で始まる *sa*^{N}（つまり *i*^{T} を前に伴わない）は，*i*, *u*, *ṛ*, *ḷ*（*i*^{K}）で終わる動詞語基の後では，*k* を it とする」。

§ 20【*dhātoḥ* の文言を必要とする立場】

Bhāṣya

yac cāpy etad uktaṃ “karmagrahaṇāt sanvidhau dhātugrahaṇānarthakyaṃ”, “sopasargaṃ karmeti cet karmaviśeṣakatvād upasargasyānupasargaṃ karma”, “sopasargasya hi karmatve dhātvadhikāre ’pi sano ’vidhānam akarmakatvād” iti svapakṣo ’nena varṇitaḥ / yuktam iha draṣṭavyaṃ. kiṃ nyāyyaṃ karmeti /

他方，以下のことも言われていることについて：「*karman-* の文言があるので，*sa*^{N} の規定においては *dhātu-* の文言は意味がない（Vārt.1）。行為の対象は動詞前接辞を伴う［動詞語基が示す行為］だというのであれば，動詞前接辞は行為の対象を限定するものであるから，行為対象は動詞前接辞を伴わない［動詞語基が示す行為］である。（Vārt.2）。というのは，動詞前接辞を伴う［動詞語基が示す行為］が行為の対象となるならば，動詞語基の支配規則の下にあるとしても，*sa*^{N}［の使用は］規定されないから。［動詞前接辞はそもそも］行為の対象とならないので（Vārt.3）」。この人（Vārt. の作者）によって自説が記されている。ここでは理に適ったこと［だけ］が見られるべきである：「［動詞前接辞を伴う動詞語基と伴わない動詞語基が示す行為の中，］どちらが適切な行為の対象なのか」。

Pradīpa

svapakṣa *iti / yady api sarva eva svapakṣaṃ varṇayanti / tathāpi parapakṣadūṣaṇābhiniveśād ayukto ’pi svapakṣo varṇita ity uktaṃ bhavati //*

yuktam *iti / yad eva nyāyyaṃ tad eva grāhyam / na tu durabhiniveśaḥ kārya ity arthaḥ //*

「***svapakṣaḥ***」以下について。たとえ［これら］全て［の Vārt. ］が自説を記しているとしても，そうだとしても，他説への論難へと入り込むあまり，不適切な自説が記されていると言われてしまう。

「***yuktam***」以下について。理に適っていること，それだけが理解されるべきである。だが，［論難への］悪い入り込みはなされるべきではない，という意味である。

解説

もし §19 の Bhāṣya で述べられるように *dhātoḥ* の文言を優先的に残しておくべきと考えるならば，当然，Vārt. 1－3 で述べられた，*dhātoḥ* の文言は不要とする見解（→

§3－6）と矛盾することになる。パタンジャリは，ここで，Vārt. 1－3 に反して *dhātoḥ* の文言は必要であるという立場に立ち，当該 Vārt. からは適切な陳述だけを取り上げるべきであると説く。適切な陳述とは即ち前接辞を伴う動詞語基が行為対象（*karman-*）なのかどうかという問いである。

§ 21【*dhātoḥ* を必要とする立場】

Bhāṣya

etac cātra yuktaṃ yat sopasargaṃ karma syāt /

そして，この場合はこのこと，つまり行為の対象は前接辞をともなうものとなり得るということは理に適っている。

Pradīpa

yat sopasargakam *iti dhātūpasargasaṅghātena hi kriyāviśeṣasya prakramād arthadvārkaṃ tasyaiva karmatvam ity arthaḥ / viśiṣṭaiva ca kriyā sādhanena nirvartyate na tūtpannā satī viśeṣaṇenānyata utpannenābhisaṃbaddhyate / tatra yady api dhātur vācaka upasargas tu dyotakas tathāpy asati dhātugrahaṇe vācakadyotakavibhāgasya śabdenehānaṅgīkṛtatvāt saṅghātād evotpattiḥ syād iti bhāvaḥ /*

“*upapadam atiṅ*” *ity atra ca* “*sādhanaṃ hi kriyāṃ nirvartayati tām upasargo viśinaṣṭi*” *ity utpattiviśiṣṭāyā eva kriyāyā āśrityoktam ity avirodhaḥ / atha vā saty api dhātoḥ pūrvaṃ sādhanayoge iṣikarmatvam iha viśiṣṭāyā eva kriyāyāḥ pratipādyam iti pūrvam upasargeṇa saṃbandho dhātugrahaṇe ’sati sopasargāt sana utpattiprasaṅga eva //*

「***yat sopasargam***」以下について。何故ならば動詞語基と動詞前接辞の複合体によって，特定の行為が歩み始める（特定の行為の理解が生じる）ので，それ（複合体）こそが行為の対象であることが意味を通じて［理解される］から。以上が意味である。行為は［動詞前接辞によって］限定された［後に］，［行為］実現要素（*sādhana-*）によって生み出されるのであって，限定要素（*viśeṣaṇa-*）と共に生じつつある時には，別のものから生じた，［行為実現要素］には結び付けられない。その場合，たとえ動詞語基が［行為を］言い表すのに対し，動詞前接辞が［行為を］暗示するとしても，そうであっても，*dhātu-* の文言がなければ，言い表すものと暗示するものという分割は発語形によって受け入れられない（*aṅgī-√kṛ*「自らの一部にする，受け入れる」）ので，複合体の後に［*sa*^{N}

が］生じることが起こり得る[7]；以上が意図するところである。

「人称語尾以外で終わる upapada は常に，［統語上結びつく］別の語と一緒に複合語を形成する（Pāṇ. II 2,19）[8]」，そしてこの［規則］について「何故ならば行為実現要素は行為を生み出し，動詞前接辞はそれ（行為）を限定するから（Pat. ad Pāṇ. II 2,19, vol.I, p. 417, line 23）」と，［意味の］生起が限定される行為に依拠して言われている。従って［複合体の後に *sa*^{N} が導入されるという見解は］矛盾しない[9]。或いはまた，［動詞前接辞より］先に動詞語基が行為実現要素へと結びついているとしても[10]，ここでは限定された行為こそが，*iṣ*［が示す行為の］対象であることが理解されるべきである；従って，先に動詞前接辞へと結びつく[11]。［それ故］*dhātu-* の文言がなければ，動詞前接辞を伴う［動詞語基］の後ろで *sa*^{N} が生じる可能性がある。

解説

動詞語幹の範囲を確定するために *dhātoḥ* の文言を必要とするということは即ち，行為対象が動詞語基と動詞前接辞から構成されることを前提としていることになる。Pradīpa によれば，例えば *kaṭaṃ prācikīrṣat* の文において，*prācikīrṣat* が示す行為は動詞前接辞 *pra-* によって限定された後に，行為実現要素 *kaṭam* によって完成するのであって，動詞前接辞と動詞語基とが結びつく前に，それぞれが行為実現要素と結びつくのではない。複合体（*saṃghāta-*）が動詞語基と動詞前接辞とからなることを前提としていても，実際には両者は分割（又は分割が意識）されずに発語されるので，この文言が必要となる。

また Pāṇ. II 2,19 に対する Bhāṣya においてパタンジャリ自身が「行為実現要素は行為

---

[7] Uddyota : *karmaṇa ity asya karmabodhakād ity arthaḥ syād iti bhāvaḥ*「“行為対象の後に” というこの［文言］が行為対象を理解させるからという意味になり得る；以上が意図するところである」

[8] Pāṇ. II 2,19 *upapadam atiṅ*［*nityam* 17］「人称語尾で終る語（つまり動詞）以外の upapada は常に，［統語上結びつく］別の語と一緒に［tatpuruṣa］複合語を形成する。」

[9] Udyotta : *viśiṣṭāyā eva kriyāyā dhātumātrād bodhotpattim āśrityety arthaḥ // evaṃ ca pakṣāntaratvād avirodha iti bhāvaḥ*「動詞語基だけから限定された行為の理解が生じることに依拠してという意味である。そうだとすると，別の見解となるので，矛盾しない。以上が意図するところである」

[10] Cf. Pat. ad Pāṇ. VII 4,10 vol. III, p. 93, lines 23f. : *pūrvaṃ dhātuḥ sādhanena yujyate paścād upasargeṇa*

[11] Uddyota : *sādhanasambandhottaram api upasargasambandhe − icchatyarhakasan sambandhāpekṣayāntaraṅgatvāt pūrvam upasargasambandhaḥ*「動詞前接辞へ結びつく際は，行為実現要素に結びついた後に［結びつくこと］もある。［つまり，］*icchati* の意味を持つ *sa*^{N} は，［文法操作の適用根拠が］内側にある（適用順序が先）ので，結びつくことを期待して，先に動詞前接辞に結びつく」

を生み出し，動詞前接辞はそれ（行為）を限定する」ことを前提としているので，*dhātu-* の文言は不要であるという陳述と矛盾しない。

§ 22【*dhātoḥ* を無用とする立場からの反論とそれに対する答え】

Bhāṣya

nanu coktaṃ sopasargasya hi karmatve dhātvadhikāre 'pi sano 'vidhānam akarmakatvād iti / naiṣa doṣaḥ / karmaṇa iti naiṣā dhātusamānādhikaraṇā pañcamī / karmaṇo dhātor iti / kiṃ tarhi / avayavayogaiṣā ṣaṣṭhī / karmaṇo yo dhātur avayava iti /

（反論）だが言われているではないか：「動詞前接辞を伴う語［が示す行為］が行為の対象となるならば，動詞語基［の文言］の支配下（Pāṇ. III 1,91）にあるとしても，*sa*^{N}［の導入は］規定されないから。［動詞語基は］行為対象［そのもの］ではないので。」（Vārt.3）。

（答え）このような瑕疵はない。*karman-* という語は *dhātu-* の語と同一の対象を表示する第 5 格（Abl.）［語尾で終る語，つまり］*karmaṇo dhātoḥ* ではない。それなら何か。これ（*karmaṇaḥ*）は部分と結びつく第 6 格（Gen.）である。「行為の対象の一部が動詞語基であるもの」［を意味する］。

Pradīpa

***kiṃ tarhī**ti / vyāptigrahaṇāya ṣaṣṭhīpakṣa āśrīyate pañcamyāṃ hi satyām anupasargād evotpattiḥ syān na tu sopasargāt / ṣaṣṭhīpakṣe tu sopasargād api sidhyati //*

「***kim tarhi***」以下について。一貫性を確保するために第 6 格の立場が根拠づけられる[12]。何故なら，第 5 格（Abl.）語尾［で終る語］だとすれば，動詞前接辞を伴わない［動詞語基］の後ろにのみ，［*sa*^{N} が］生じることが起こり得るが，他方，動詞前接辞を伴う［動詞語基］の後ろには［起こり得］ないから。だが第 6 格の立場においては，［動詞語基］の後ろであっても［*sa*^{N} が生じることは］確立する。

§ 23【*dhātoḥ* を無用とする立場からの反論】

Bhāṣya

yady avayavayogaiṣā ṣaṣṭhī kevalād utpattir na prāpnoti / cikīrṣati jihīrṣati /

[12] Udyotta : *vyāptilābhāyety arthaḥ // bahulakṣyasambandhlābhāyeti yāvat*「一貫性を得るためにという意味である。［つまり］“多くの語形との結びつきを得るために” ほどのことである」。

［全体と］部分の関係を表す第 6 格（Gen.）語尾［で終る語］であるならば，単独の語（Simplex）の後ろに［*sa*^{N} が］生じることが結果しない。［だが，現実には］*cikīrṣati*, *jihīrṣati*［が用いられる］。

解説

§22－23 では §6 で展開された議論が再び取り上げられる。動詞前接辞と共に行為対象（*karman-*）を形成する部分にすぎない動詞語基が，規則の文言 *karmaṇaḥ* と同一の対象を指示することにならない。*karmaṇaḥ* が部分と全体の関係を表す第 6 格（Gen.）形と考えるならば，今度は単独の語基は部分を持たないので，その後に *sa*^{N} を導入することはできない。

§ 24【*dhātoḥ* を必要とする立場】

Bhāṣya

eṣo 'pi vyapadeśivadbhāvena karmaṇo dhātur avayavo bhavati /

これ（単独の語形）も［*avayavaṣaṣṭhī* と］名づけられるものに準ずる関係［と見なすこと］によって動詞語基は行為対象［を表示する複合体］の部分となる。

Pradīpa

***eṣo 'pī**ti / prayogabhedān nānārūpasya karmābhidhāyino 'vayavaḥ sanprakṛtitvenāśrīyamāṇo dhātur ity arthaḥ //*

「*eṣo 'pi*」以下について。使用の区別に応じて，様々な形をとる，行為対象を表示する［複合体］の部分は，*sa*^{N} を伴う語基として認められる時は，動詞語基であるという意味である。

解説

直前の §23 で述べられたように，部分と全体の関係を示す第 6 格（Gen.）と考えると Simplex の動詞は部分を持たないので，その後に *sa*^{N} が導入されないことになる。そこで，*karamaṇaḥ* を *avayavaṣaṣṭhī* に準じて取り扱うことにより，単独の動詞語基は部分を持つものとして理解され，その後にも *sa*^{N} を導入することが可能になる。

§ 25【*dhātoḥ* を無用とする立場】

Bhāṣya

kāmaṃ tarhy anenaiva hetunā kyaj api kartavyaḥ / mahāntaṃ putram icchatīti / karmaṇo yat subantam avayava iti /

それなら，同じこの根拠によって，望むがままに，$^{K}ya^{C}$ で終わる語（Denom.）も作られ得る。*mahāntam putram icchati*「偉大な息子を欲する」という［文と同じ意味で］。［即ち］「行為の対象の一部となる，格語尾で終わる［語］（名詞）」と［した上で］。

Pradīpa

kāmam iti / icchayety arthaḥ / icchāyā vyāghātābhāvād ity arthaḥ //

「*kāmam*」以下について。「欲求に従って」という意味である。「欲求を阻むものがないから」という意味である。

解説

karmaṇaḥ が部分を示す第 6 格（Gen.）だと考えるならば，この文言を受け継ぐ，直後の，Denom. に関する規則（Pāṇ. III 1,8）についても同じことが言えることになる。例えば，*māhantaṃ putram icchati*「彼は偉大な息子を欲する」という文において，欲求の対象を構成するのは *mahāntam* と *putram* であり，両者に Denom. をつくる $^{K}ya^{C}$ が導入され得ることになる。

§ 26【*dhātoḥ* を必要とする立場】

Bhāṣya

na kartavyaḥ / asāmartyān na bhaviṣyati / katham asāmarthyam / sāpekṣam asamarthaṃ bhavatīti //

［$^{K}ya^{C}$ で終わる語（Denom.）は］作られ得ない。［*icchati* は *mahāntam putram* との］意味的結合がないので, 用いられることにはならない。どうして意味的結合がないのか。「［複合語的結合の外にある語への結びつきを］期待する語は意味的結合がないものとなる」。

Pradīpa

asāmarthyād *iti / subantāt kyajvidhānāt padavidhitvāt*[13] *samartha-paribhāṣopasthānād iti bhāvaḥ / sanvidhau tu tadanupasthānāt sāpekṣād api sana utpattiḥ // atha vā dhātur eva viśiṣṭāṃ kriyām āha upasargas tu dyotaka iti sāpekṣatvābhāvaḥ //*

「*asāmarthyād*」以下について。格語尾で終わる語の後では $^{K}ya^{C}$ の導入が規定されるから，［そして］語の規定は意味的結合に関する包括規則（Pāṇ. II 1,1）の［管轄］下にあるから。以上が意図するところである。他方，sa^{N} の導入規定の場合は，それの［管轄］下にないから，［語ではない要素（動詞前接辞）に結びつくという］期待を伴う［動詞語基］の後にも sa^{N} が起こる。或いはまた，「動詞語基だけが限定された行為を言い表すのに対し，動詞前接辞は［行為を］暗示する」。従って，期待（sa^{N} が動詞前接辞へと結びつく期待）を伴うことは［そもそも］生じない。

解説

mahāntaṃ putram icchati と同じ意味を表す Denom. を作ることはできない。複合語的結合の外にある語への結びつきを期待する語は意味の結びつきがないものとして扱われるからである（*sāpekṣam aasmarthaṃ bhavati*）。同じ議論は Pat. ad Pāṇ. II 1,1（vol. I, p.360, lines19f.）にも見られる[14]。Pāṇ. II 1,1 によれば，統語的要素（*pada-*）の操作に関する規定（Pāṇ. I 4,14ff.）は統語的，又は意味的に結びつきがある場合に，複合語形成の際に適用される。例えば，*mahat kaṣṭaṃ śritaḥ*「大きな困難に寄りかかって（陥って）いる者」という表現に対応する複合語をつくることはできない。従属要素（A）は，主要素（B）である実体詞を修飾すると両者の意味は統合され一まとまりの意味を表す（*ekārthībhāva-*）。その場合，複合語的結合に外にある統語要素（C）と結びつくことはできない。*mahat kaṣṭaṃ śritaḥ* において，*śritaḥ*（C）は従属要素 *mahat*（A）と主要素 *kaṣṭam*（B）の結びつきの外にあるので，この分析表現に対応する統合表現を作ることはできない[15]。同様に *mahāntaṃ putram icchati* の場合は *mahānt-*（A）と *putra-*（B）と

[13] Vedavrata 本の読みに従う。Nirṇaya Sāgar 本（Śivdatta/Raghunātha）のテキストには，*padavidhitvāsmarthya°* とある。

[14] Cf. Joshi/Roodbergen, *Patañjaliś Vyākaraṇa-Mahābhāṣya : Samrthāhnika*（P. 2.1.1）, 1968, p. 33f.

[15] Pradīpa（Pat. ad Pāṇ. II 1,1 :）: *vṛttau hy upasarjanapadena pradhānārthābhidhāyinā bhāvyam / svaviśeṣaṇāpekṣāyāṃ ca tasya prādhānyam iti katham ekasyaikadā prādhānyam ekārthībhāvaś ca syāt*「統合表現において，主要素（A）の意味を表示する従属語（B）が生じるべきである。だが［従属要素は，］自らを限定することを期待する時，それ（結合外にある語）に対する主要素に属する。従ってどのよ

いう結合の外に *icchati*（C）があるので，$^{K}ya^{C}$ を導入して Denom. を作ることができない。

これに対し，Desid. の場合は，Pāṇ. II 1,1 は適用されないので，以上のような問題はない。或いは，適用され得るとしても，限定された行為を表示するのは動詞語基であり，動詞前接辞は限定された行為を暗示するものなので，動詞語基と動詞前接辞の間に統語的・意味的結合が期待されることはない。

うにして一つの語が一度に主要素に属しながら，また一まとまりの意味を表示するものになり得るのか」。

A Study of Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7（2）

Junichi Ozono

The grammatical rule Pāṇ. III 1,7 prescribes the formation of a desiderative stem in the sense of desire :

Pāṇ. III 1,7 *dhātoḥ karmaṇaḥ samānakartṛkād icchāyāṃ vā*

'In the sense of desire the suffix *sa*^{N} is optionally introduced after a verbal base, [if the act denoted by a verb is] the object of desire and has the same agent [as that of desiring act]'

My article in *The Annual Reports of Graduate School of Arts and Letters Tohoku University*, vol. 63（2013－2014）dealt with Patañjali's Bhāṣya discussing the purpose of the word *dhātoḥ* 'after a verbal base' in the above rule.

After this discussion, Patañjali discusses the purposes of the words *karmaṇaḥ* and *samānakartṛkād*. Since no desiderative verb which does not denote the object of desire and which does not have the same agent as desiring is found in actual usage, neither word need be stated in the rule above. Nevertheless, either the word *karmaṇaḥ* or *dhātoḥ* is necessary for differentiation of verbal stem and preverb. In this case, the *dhātoḥ* should preferably be stated, so that the suffix *sa*^{N} can be treated as an *ārdhadhātuka*-suffix. However, from this statement it follows that the object of desire（*karman-*）consists of preverb and verbal base（*saṃghāta-*）. This has been rejected in the preceding discussion. If interpreting the word *karmaṇaḥ* as a partitive genitive（*avayavaṣaṣṭhī-*）, *karman-* is to be understood as consisting of the two parts i.e. verbal base and preverb, then the suffix *sa*^{N} is not to be introduced after a simplex, which cannot be divided.

By treating *karmaṇaḥ* as a quasi-partitive genentive（*vyapadeśvadbhāvena*）, the *sa*^{N} can be introduced after a simple verb as well as a verb with preverb. The same, however, is not true of the denominative stem formed by adding the suffix such as ^{K}*ya*^{C} to a noun stem. A denominative stem cannot convey the same meaning as an analytic expression such as

mahāntaṃ putram icchati ‘he desires a great son’, in which the verb *icchati* is syntactically unconnected to *mahāntam.*